はじめに

政治と統計の関係──語源から

歴史を振り返ってみると，古代より為政者（またはそれを支える者）には統計的なセンスが求められていたことは間違いない．それは，言葉の語源から確認できる．たとえば，「治（める）」という漢字を頭に思い浮かべてほしい．「治」は，川（氵）に作為を加える（台）ことをもとにしている．

古代中国では，民の安全を守り，農業を行ううえで，河川の氾濫を食い止めることが為政者の大きな使命であった．「川を治めること」が「国を治めること」であり，国を治めるうえで重視されていたのが，民の数を把握することであった．民は納税者であり，兵士であり，そして河川工事の労務者だったからである．民の数は国力と同義であったことから，中国では，「戸」と呼ばれる家族集団単位で民の数を把握する仕組みが発達した．そして，その制度は日本にももたらされ，飛鳥時代の「庚午年籍・庚寅年籍」となり，豊臣秀吉による「太閤検地」などを経て，現在の戸籍制度・住民基本台帳制度につながっている[1]．

東洋だけではなく西洋においても，民の数を把握することは政治の基本であった．それは，「state（国家，州）」と「statistics（統計学）」の語源からうかがい知ることができる．この 2 つの語源は，ラテン語の「状態」を意味する単語 status といわれる．国を示す state は，同意のイタリア語 stato に「現在の支配体制・支配機構」という意味が付加されたことに起因する．一方，statistics という単語は，「社会の人口や経済といった『状態』を把握する」という意味か

[1] 戦前の戸籍制度は，徴税・徴兵のための制度としての位置づけが濃く，「家制度」の根幹をなす制度であった．

ら派生した[2]．

今日，政策の立案・遂行のために国家が統計をとることは，日常的に行われている[3]．生産者人口（労働力の中心となる 15 歳以上 65 歳未満の人口）が把握できれば国の歳入額の見込みがつき，65 歳以上の高齢者人口がわかれば高齢者福祉にかかるおおよその予算を推測することができるからである．

日本では，公的統計の作成や提供などを定めた法令として**統計法**[4]がある．国の組織が統計調査を行う場合，統計法の規定によって，事前に総務大臣の審査・承認を受けることになっている[5]．現在の統計法では，「公的統計は行政利用だけではなく，社会全体で利用される情報基盤」と位置づけられている．国勢調査など，国が行った統計は，「**政府統計の総合窓口 (e-Stat)**[6]」で検索することが可能である．

学ぶに際して

法学部の学生に「進学するにあたり，なぜ法学部を選んだのか」と尋ねたら，「高校時代，暗記が得意で社会の点数がよかったから」と答える者が多いのではないだろうか．「公務員になるには，法律・政治といった社会の仕組みを学ぶ法学部が有利」と思って選んだ者もいるかもしれない．たしかに，私たちが暮らす社会は法律に基づいて成り立っており，社会の仕組みを知っているほうが生活上，有利である．そのため，政治家や公務員になりたいというのであれば，法律や制度の理解は必須である．しかし，「法律や制度を覚えてさえいれば，政治家や公務員としてやっていける」という姿勢は，今日では通用しない．近年では，住民の意向を数値で把握できたり，政策の評価を定量的に測定できたりすることが，より重視されるようになっている．とりわけ，説明責任を果たす観点から，社会を数値で把握できる公務員を求める地方自治体は増える傾向にある．

---

[2] statistics に「統計データ」の意味と「統計学」の意味があるのは，このような歴史的経緯を反映しているといえるだろう．

[3] 細野 (2005) や伊藤 (2011) など，政策立案の観点から書かれた類書も出版されているので，チェックしてみるとよいだろう．

[4] 現在の統計法（平成 19 年 法律第 53 号）は，旧統計法（昭和 22 年 法律第 18 号）を全面改正する形で成立した．

[5] 統計法について (http://www.stat.go.jp/index/seido/1-1n.htm)

[6] 政府統計の総合窓口 (e-Stat) (http://www.e-stat.go.jp)

政治学の研究分野も，統計的手法を用いた実証研究が当たり前になりつつある．特に，現代政治を学び，分析するのであれば，**社会調査法**や統計学を学ばねばならない時代となった．「あろう・だろう」の水掛け論に終始するのではなく，データで仮説を検証することが求められているのである．

本書は，数式はやや苦手だが，社会をデータで読み取ることに関心のある法学部生や公共政策大学院生，また実際の現場で統計分析をする必要がある地方公務員を対象としている．社会や政治を統計で把握したい初学者向けの入門書と，言い換えてもよい．そうした事情もあり本書は，「統計量の計算は統計解析ソフトにお願いしながら，『習うよりも慣れろ』で社会科学分野における統計を理解していく」というスタンスをとる．「習うより慣れろ」方式を採用するのは，講義での経験から「数学に若干の不安を抱いている初学者にとって，そうした方式のほうが理解は進む」と筆者が思うからである．もちろん初学者であっても，統計学をきちんと理解してから報告書や論文を書くべきである．ただ，教育する側がそうした姿勢を強く求めると，初学者，特に研究者志向ではない者はかえって萎縮してしまい，「統計は難しい」と距離をおいてしまうことになる．筆者としては，報告書や論文を書くことも大事であるが，初学者の段階では自分の素朴な問題意識をデータで検証するぐらいの軽い感覚で接するほうが，統計学に親しみをもちやすく，抵抗感なく学んでいけるのではないかと思う．

なお本書では，章末に練習課題だけではなく，レジュメ（論文の内容等を簡潔にまとめたもの）を作成する課題をつけている．レジュメを作成しながら，先行研究で統計分析がどのように用いられ，結果がどのように解釈されているかについてを学ぶことも，社会科学の分野では大事である．学習する際には留意してほしい．

加えて，政治分野の統計分析をより深く学んでいきたいのであれば，ヒアリングなどといった質的調査の手法も覚えるべきであることを指摘しておきたい．もし，あなたが政策立案などに従事する公務員などを目指しているのであれば，なおさらである．なぜなら，統計分析ばかりを行っていると，分析結果の解釈が世ずれしてしまうからである．

某 TV ドラマではないが，政治は「研究室の中ではなく，現場で起きている」．世ずれした数値の解釈をしないよう，社会にアンテナを張ることも忘れないで

ほしい.

2015 年 2 月　著　者